



UICC日本委員会の 委員長就任にあたって

野田 哲生



日本のがん研究者は、1933年のUICC（国際対がん連合）の創設以来、その活動に深く関わって来ました。特に、1966年に東京において世界癌会議が開催されてからは、大変に緊密な連携を維持してきました。現在、国内のUICC加盟組織は29機関に上りますが、それらの機関が集結して組織されているのがUICC日本委員会です。

日本委員会は、世界でのUICCの活動を支えるとともに、国内およびアジアにおいて独自の対がん活動を行ってきました。そして、昨年10月には、1966年の東京における世界癌会議から50年が経過したことを記念して、これまでの活動を振り返るとともに、今後の活動の方向性を見定めるため、国際シンポジウムを始めとする各種行事を開催しました。私は、これらの行事が終了した時点で、前任者の北川知行委員長（がん研究所名誉所長）の後を受けて、日本委員会の委員長に就任いたしました。

50年前の世界癌会議には、世界中の著名ながん研究者が集結し、がん研究の素晴らしい成果

が示されました。そして、そうした20世紀を代表する研究成果が、実際のがんの治療に活かされるようになった現在、我々は、真のがん制圧のためには、こうした優れた科学的成果のみでは充分ではなく、世界レベルでのがん予防の戦略と、優れたがん治療法をがん患者さんに届けるための社会基盤の整備が必須であることを強く感じています。一方、世界的な視点からは、発生するがん種の人種差が明らかとなり、さらに国により医療制度が大きく異なるなど、国や地域による特殊性が存在する点も、がん予防・がん医療における特徴です。

UICC日本委員会は、WHOとの緊密な連携のもと、がん制圧の戦略を進めているUICC本部の活動を支えながら、日本における戦略推進を強力に進めるとともに、日本あるいはアジアにおける特殊性を強く意識した、がん予防戦略や優れたがん医療の展開を促進することを目指しています。今後とも、UICC日本委員会の活動をご理解頂き、一層のご支援を頂きますよう、よろしくお願い致します。

略 歴 書

氏 名：^{の だ てつお}野田 哲生

生 年 月 日：昭和29年11月27日

現 職：公益財団法人がん研究会 代表理事・常務理事
 同上 研究本部 本部長・がん研究所 所長
 東北大学名誉教授

学 歴：
 昭和55年 3月31日 東北大学医学部 卒業
 昭和59年 3月31日 東北大学大学院医学研究科 博士課程（外科学専攻） 修了

職 歴：
 昭和59年 4月 1日 米国国立がん研究所 (NCI) フレデリック癌研究施設 博士研究員
 昭和60年10月 1日 京都大学ウイルス研究所 癌ウイルス部門 助手
 昭和63年 6月 1日 米国マサチューセッツ工科大学 ホワイトヘッド研究所 客員研究員
 平成 2年11月 1日 (助)癌研究会 癌研究所 細胞生物部 部長
 平成 9年 7月 1日 東北大学大学院医学系研究科 分子遺伝学分野 教授
 平成14年11月 1日 東北大学大学院医学系研究科 附属創生応用医学研究センター センター長
 平成18年 4月 1日 (助)癌研究会 癌研究所 所長
 平成18年 6月17日 同上 理事 (癌研究所 所長 兼任)
 平成23年 4月 1日 公益財団法人がん研究会 常務理事 (がん研究所 所長 兼任)
 平成25年 6月19日 同上 代表理事・常務理事 (研究本部 本部長・がん研究所 所長 兼任)
 (兼任)
 平成18年 4月 1日 (助)癌研究会 ゲノムセンター 所長
 平成23年 4月 1日 公益財団法人がん研究会 ゲノムセンター 所長
 平成28年10月1日 公益財団法人がん研究会がんプレジジョン医療研究センター 所長

主な所属学会：
 日本癌学会、日本学術会議連携会員

専 門 分 野：
 分子遺伝学

CONTENTS

UICC 日本

UICC日本委員会の委員長就任にあたって野田 哲生	1
世界がん会議 (東京-1966) 50周年記念事業	
UICC世界がん会議50周年記念行事を終えて田島 和雄	3
“小学生からのがん教育”西山 正彦	6
小学生からのがん教育中川原 章	9
学校関係者の立場から見たこれからの「がん教育」細山 貴信	10
〈UICC世界がん会議 (1966年-東京) 50周年記念祝賀会〉 タバコフリーサミット2017を開催して望月 友美子	13

UICC 世界

World Cancer Summit & World Cancer Congress 2016赤座 英之	16
--	----

Changing Tomorrow: Collaborating to Enhance Clinical Trials堀江 重郎	18
--	----

UICC アジア

APCC2017に参加して河原 ノリエ	19
UICCセッション開催のお知らせ 21	21
World Cancer Day We can. I can. 22	22
UICC日本委員会加盟役員組織と役員 24	24



世界がん会議（東京-1966）50周年記念事業

UICC-Japan/JSCO-Joint International Symposium on Global Cancer Control
Date: October 22, 2016 13:40~15:40
Place: Room 4, PACIFICO Yokohama (303)

Chairs: Futoshi Nakagama (National Cancer Center, Japan), Kazuhiro Yoshida (Department of Surgical Oncology, Gifu University, Japan)

Presenter: Global cancer control issues - Challenges and opportunities
Mary K. Gospodarowicz (Immediate past President of UICC, UICN for International Cancer Control / Department of Radiation Oncology, Princess Margaret Cancer Center, University of Toronto, Canada)

The World Cancer Declaration as the global goal of UICC activities & reducing the inequalities in childhood cancer
M. Tezer Kurtluk (President of UICC / Department of Pediatric Oncology, Hacettepe University Cancer Institute and Oncology Hospital, Ankara, Turkey)

ASCO's global oncology strategy and activities in Asia
Julie M. Vose (Immediate past President of ASCO / Internal Medicine, Division of Oncology & Hematology, University of Nebraska, USA)

How Japan can contribute to Universal Health Coverage
Keizo Takemi (Member of the House of Councilors of Japan, expert in global health issue, Japan)

Current status and future of cancer control & researches in Korea
Jae Kyung Roh (Secretary General of APOCC / Division of Medical Oncology, Yonsei University, Korea)

The unique aspects of cancer in Asia
Hideyuki Akaza (Director of UICC, ARO / Asian Regional Office / Strategic Investigation on Comprehensive Cancer Network, The University of Tokyo, Japan)

The Yamagiwa-Yoshida International Fellowship: 40 years of contributions to UICC from Japan
Tetsuo Noda (Board Member of UICC / Director of the Cancer Institute of FCK, Japan)

Sponsored by Princess Takamatsu Cancer Research Fund & The Japan World Exposition 1970 Commemorative Fund

UICC日本委員会 世界がん会議50周年記念事業事務局
〒113-8500 東京都江東区有明3-0-1 (山崎) がん研究交流センター内 TEL 03-3570-0542 FAX 03-3570-0519

UICC-Japan 第54回 日本癌治療学会学術集会
UICC日本委員会・日本癌治療学会合同シンポジウム
世界がん会議（東京-1966）50周年記念事業

小学生からのがん教育

2016年10月22日(土) 9:00-11:30
第4会場(パシフィコ横浜 3F 303)

北川 夏行 (国立がん研究センター がん予防・検診・啓発部長)

Part 1 教材開発（教員用、子ども用）
1. Introduction - 教材の紹介 - 望月 友美子 (UICC日本委員会 設立40周年記念事業員)
2. よりよい教材作成を目指して提供する立場から 中川 真一 (国立がん研究センター がん予防・検診・啓発部長)
3. 音楽区「がんに関する教育」の実践 藤山 貴匡 (東京大学 医学部 がん予防・検診・啓発部長)
4. がん患者の立場からみたがん教育 天野 雅介 (国立がん研究センター)

Part 2 がん教育の現状と教育研究 - 教材システム
5. 人材を確保する立場から 生田 学 (東京大学 医学部 がん予防・検診・啓発部長)
6. 学会の立場から 相賀 康介 (日本癌治療学会 がん教育委員会 委員長)
7. 患者の立場から 三好 健 (がん予防・検診・啓発部長)
8. 教員研修から教員養成まで - 「がん」という教材を活用した人材育成 - 飯友 祐子 (国立がん研究センター がん予防・検診・啓発部長)

Part 3 がん教育の評価とフォローアップ
9. 標準評価と児童生徒等のフォローアップの在り方 横山 誠司 (国立がん研究センター がん予防・検診・啓発部長)
10. 学校長の立場から 高橋 穂 (国立がん研究センター)
11. 小学生からのがん教育の評価とフォローアップ - 心臓がん専門家の立場から - 中川 真一 (国立がん研究センター がん予防・検診・啓発部長)
12. 地方大学に目を向けたがん教育、そして学会の立場から - 大学が行うがん教育実践活動 - 片岡 秀隆 (日本癌治療学会 がん教育委員会 委員長)

UICC日本委員会・日本癌治療学会
小学生からのがん教育支援委員会

22日(土) 13:40-15:40 がん研究交流センター内 (研究交流センター)
22日(土) 16:00-17:00 がん研究交流センター内 (研究交流センター)
22日(土) 17:00-18:00 がん研究交流センター内 (研究交流センター)

UICC日本委員会 世界がん会議50周年記念事業事務局
〒113-8500 東京都江東区有明3-0-1 (山崎) がん研究交流センター内 TEL 03-3570-0542 FAX 03-3570-0519

UICC世界がん会議50周年記念行事を終えて

三重大学医学部客員教授

田島 和雄

はじめに

国際対がん連合 (UICC) は1933年に民間団体組織により設立され、ジュネーブに本部を置き、地球規模のがん克服を目指した活動を続けてきた。日本は発足当初から国内組織を結成し、1966年には吉田富三博士を会長として東京で大規模な国際がん会議 (Tokyo 1966) を開催した。その時には、国内から1000人、海外から3000人の合計4000人の参加者が集まり、当時としては異例に大規模な国際会議を開催し、その後の日本のがん研究と対がん運動の発展の跳躍台となった。

さらに、UICC日本委員会は1975年に山際吉田記

念国際がん研究基金を設立するなど、今日までUICCとともに世界のがん研究の発展に貢献してきた。現在、UICCは世界162カ国以上から1000以上の団体が参加する大きな国際的組織に発展している。

昨年の2016年は東京で国際がん会議を開催後、50周年にあたるため、これを機会に過去50年間のがん研究と対がん活動の発展史を総括すると共に、今後のUICC活動の発展と国内外における革新的ながん研究とがん対策の発展を期するため、平成28年10月22日 (土曜日) に以下の様な内容の記念行事を開催した。

午前中は同時に開催されていた第54回日本癌治療



学会と国際対がん連合日本委員会との合同シンポジウム「小学生かからのがん教育」、午後の前半は国際シンポジウム「Global Cancer Control」、その後で記念祝賀会が開催された。合同シンポジウム「小学生かからのがん教育」については本ニューズレターに別に報告するので他の内容について簡単に紹介する。

国際シンポジウム 「Global Cancer Control」

がん問題は老若男女を問わず世界共通となっているが、開発途上国では経済的発展を妨げる深刻な要因にもなっている。また、多くの国々でがんの疼痛に対する鎮痛剤としての麻薬が全く入手できず、多数のがん患者が疼痛に苦しみながら亡くなっている。このシンポジウムには現UICCリーダーの代表格のテゼール・クテュルーク理事長（トルコ）とメアリ・ゴスポダロヴィッチ前理事長（カナダ）を招き、日本におけるグローバルな視点に立った対がん活動の振興を図った。

本シンポジウムの前半では、UICC前理事長のメアリ・ゴスポダロヴィッチ博士が世界のがん対策の問題点、特に痛みの管理を含む緩和ケアやがん生還者への対応不足などに関する問題点について詳細な説明があった。

また、現理事長のテゼール・クテュルーク博士はUICCの対がん活動が目指す目標として、UICCの掲げる9項目の世界対がん宣言、および開発途上国における小児がん対策の遅れの問題について報告した。続いて、米国癌治療学会の前理事長のジュリエ・ボーゼ博士は、米国癌治療学会を基盤とした世界のがん治療戦略、特にアジア地域におけるがん医療の取り組みなどについて述べた。

日本側からは参院議員の武見敬三博士が「Universal Health Coverage (UHC)」の重要性、およびUHCに関する日本の世界、特にアジア地域における貢献について紹介があった。

後半では、アジア太平洋対がん連合 (APFOCC) を代表し、韓国の延世大学教授のジェ・クン・ロー博士が、韓国におけるがん撲滅のための歴史的展開について紹介した。また、UICCのアジア地域事務局 (UICC-ARO) を代表し、東京大学教授の赤座英之博士が、アジア地域におけるがん流行の実態に特化したUHC戦略の重要性について詳細に述べた。

最後に、日本癌学会前理事長、がん研常務理事の野田哲生博士がこれまでのUICCの発展に貢献してきた日本の長期に渡る重要な役割、特に山際・吉田フェローシップなどによる世界の若手研究者の育成の歴史などについて紹介した。

記念祝賀会

国際シンポジウムに引き続いて記念祝賀会が開催されたが、そこには常陸宮正仁親王殿下と華子妃殿下のご臨席も賜り、また国際対がん連合本部、文部科学省、日本医師会、さらに日本癌治療学会、日本癌学会などから、がん研究やがん医療に従事されて来られた多くの重鎮の方々も出席された。

最初に、1966年10月23日から7日間にわたって吉田富三博士を会長として東京で開催された国際がん会議（現在は世界がん会議）の録画のハイライトがDVDにより紹介された。このDVDは、東京シネマ社長の岡田桑三氏が7日間の会議の様子をフィルムに収め、そのハイライトを22分44秒にまとめたものである（写真1）。今回はその録画内容をさらに選択して



写真1

第9回国際対がん連合 (UICC) 国際がん会議 (東京1966) は吉田富三先生を会長として昭和41年10月に開催された。東京シネマの岡田桑三氏は一週間の会議の全収録内容を英語解説付きで約23分のハイライト版にまとめられ、それを岡田一男氏 (子息) がDVDに収録された。



写真2

菅野晴夫先生がUICC国際がん会議50周年記念祝賀会のため、吉田富三先生の偉業を中心に日本の病理学とがん研究の発展史としてまとめられた400頁にわたる増刷版の名著である。

12分40秒まで短縮したものである。会場の出席者は半世紀前にタイムスリップし、今から50年前の会議で取り上げられたがん研究の主要な内容のみならず、当時の日本文化も合わせ伺うことが出来た。

それらの主な内容は、はじめに国際対がん連合 (UICC) の紹介、UICC理事長のDr. Haddowのメッセージ、各国代表によるレセプション、UICCの歴史、国際会議のレセプション、参加登録受け付け、などの概要が映された。

続いて、開会式 (日本武道館)、皇太子殿下ご夫妻 (今上天皇、皇后) の入場、開会式挨拶 (吉田先生、司会はDr. Haddow)、皇太子殿下ご挨拶、各代表挨拶 (鈴木厚生大臣他)、能、歌舞伎紹介などの行事が紹介された。

学術会議の内容として、学術報告1:がんの分子遺伝学、ノーベル賞受賞研究者のDr. Ochoaの特別講演、学術報告2:白血病とリンパ腫、山際記念講演、常陸宮殿下紹介、緒方教授の司会による諸報告、山際博士がノーベル賞候補者に選出されたとの紹介、学術報告3:リンパ腫と白血病、昼食パーティー (常陸宮妃殿下、高松宮妃殿下)、パネル討論 (木下先生):がんの構造と生化学、特別講演 (Dr. Klein)、学術報告5:がんの細胞遺伝学、吉田富三先生司会による特別講演、などを紹介した。

閉会式 (琴演奏) では理事長Dr. Haddowの挨拶、

第10回国際がん会議 (米国、テキサス) の紹介、吉田先生の閉会の辞、スタッフへの謝辞の後、蛍の光により絆が固められた。

DVD観賞ののち、UICCのこれまでの活動内容に関連してがん研特別顧問の菅野晴夫博士が「UICC国際がん会議と吉田富三先生」と題して講演されることになっていたが、残念ながら菅野博士は体調を崩されて出席出来なかったため、がん研所長の野田哲生博士が代わりに紹介された。それらの内容の詳細については菅野博士の執筆による「吉田富三先生の思い出:増刷版」に詳しく述べられており (写真2)、出席者全員にその本が献呈された。続いて、UICC国内委員会を代表して癌研名誉所長の北川知行博士が「UICC国際がん会議のインパクト」と題して講演された。

DVDの観賞、二つの講演が終わって常陸宮殿下のご発声により乾杯があった。歓談中には日本のがん研究・がん医療を代表する方々 (日本学士院杉村隆院長、第54回日本癌治療学会学術総会中野隆史会長、他) から祝辞が述べられた。また、アトラクションとして青木-Charvat奈緒子氏によるバイオリン演奏が披露された。

最後に、がん研常務理事の野田哲生博士がUICC日本委員会の新委員長として今後のUICC日本委員会の方向性などについて述べ、本祝賀会は閉会となった。

第54回 日本癌治療学会学術集会 UICC日本委員会・日本癌治療学会合同シンポジウム

“小学生からのがん教育”

日本癌治療学会、群馬大学大学院病態腫瘍薬理学

西山 正彦

UICC日本委員会世界がん会議（東京-1966）50周年記念事業のひとつとして日本癌治療学会との合同シンポジウム“小学生からのがん教育”が企画され、第54回日本癌治療学会学術集会（パシフィコ横浜）3日目の2016年10月22日（土）9:00-11:30に開催されました。

“がん”はいまや国民病といえ、国民にとって、この疾患を、“あらかじめよく知り、予防し、備え、対応する”ことが必要不可欠な状況となりました。その観点から、「学校でのがん教育」が、がん対策基本計画に組み込まれ、国を挙げて開始されようとしています。

しかしながら、学校教育の現場では、その実施に関し、多くの課題に直面しています。本シンポジウムでは、学校でのがん教育を、円滑かつ効果的に実施するために、その現状と課題を明らかにし、具体的対応策を議論することを目的として企画されました。会場は170名定員でしたが、260名もの参加があり、急きょ会場外映像中継の場を設定せざるを得ないほどの活況を呈し、学術集会のpatient advocate leadership programとも連携して、活発な議論が繰り広げられました。シンポジウムは、

- 1) 教材開発（教員用、子ども用）—既存の教材の紹介とレビュー
 - 2) 外部人材の確保と育成システム
 - 3) 評価とフォローアップ
- の3Partsに分けて進められました。

また、新たな試みとして、壇上に、司会の望月友美子先生（UICC 国立がん研究センター）と小職（日本癌治療学会 群馬大学）とともに、1) 学会の立場から井本 滋 先生（日本癌治療学会教育委員会委員長 杏林大学）、2) 現場から大澤正則先生（埼玉県川口市立芝富士小学校）、3) 国の立場から衛藤 隆先生（恩賜財団母子愛育会日本子ども家庭総合研究所）、3名の先生方に常時お座りいただき、固定討論者（ディスカッタント）として、討論にご参加いただきました。

はじめに

本シンポジウムの開催に当たり、UICC日本委員会を代表してがん研名誉所長の北川知行先生が、“小学生からのがん教育：現状と課題”について、1) がん予防の姿勢を植え付け、2) 命の大切さを考えさせ、生きる力を与え、3) がんの仲間を温かく支える心をはぐくむ、ための教育は、“小学校でこそ、小学生だからこそ”行われるべきである。

その前提として、「がんとは何か」、「がんはどのようにしてできるか」、「病気としてのがんはどのような

ものか」を教える必要があるが、簡潔で直感的な理解があれば十分なのであって、教科書的、網羅的に教える必要はない。総合的に、科学的に、理解力に合わせてと力むと、児童にも教師にも負担が大きすぎる。躰のひとつのように考え、担任の先生が教えることに大きな意味があり、研究者や医師の専門家は基本的に、教材作成や、先生の教育で貢献すべきであろう。と述べられ、討論すべき方向性をご示唆いただきました。

Part 1. 教材開発（教員用、子ども用）—既存の教材の紹介とレビュー

Part 1は、望月友美子先生の“現在の教材では、小学校でのがん教育を効果的なものにするためには不十分”との明快なIntroductionによって開始されました。続いて、中学生向けの映像教材など、実際に教材の開発に関わってこられた中川恵一先生（東京大学医学部附属病院）より、教材のご紹介とともに、小

学校のがん教育においても、小学校高学年では「がんを理解する」ことが十分可能であるとのこと発表をいただきました。

教材を用いる立場から、豊島区教育委員会の細山 貴信先生は、すでになんがん教育は現実のものとなっており、平成24年からの様々な取り組みで、

第3日目 10月22日(土)		8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00
会場	部屋名/階数										
国立	第1会場 国立大ホール (1F)		特別講演3 がん 中野 隆史 演者: 中野 隆史	特別講演4 がん 中野 隆史 演者: 中野 隆史	特別講演5 がん 中野 隆史 演者: 中野 隆史	特別講演6 がん 中野 隆史 演者: 中野 隆史	特別講演7 がん 中野 隆史 演者: 中野 隆史	がん 中野 隆史 演者: 中野 隆史	がん 中野 隆史 演者: 中野 隆史	がん 中野 隆史 演者: 中野 隆史	がん 中野 隆史 演者: 中野 隆史
	第2会場 メインホール (1F)		がん 中野 隆史 演者: 中野 隆史	がん 中野 隆史 演者: 中野 隆史	がん 中野 隆史 演者: 中野 隆史	がん 中野 隆史 演者: 中野 隆史	がん 中野 隆史 演者: 中野 隆史	がん 中野 隆史 演者: 中野 隆史	がん 中野 隆史 演者: 中野 隆史	がん 中野 隆史 演者: 中野 隆史	がん 中野 隆史 演者: 中野 隆史
	第3会場 301+302 (3F)		International Session 17 Skin Cancer (Malignant Melanoma) Chair: Hisashi Umeta	International Session 18 Hepato-Biliary and Pancreas Cancers Chair: Norihito Kikudo	International Session 19 Hepato-Biliary and Pancreas Cancers Chair: Norihito Kikudo	International Session 20 Ethics for Clinical Research Chair: Kazuhiko Fujisawa	International Session 21 Esophageal Cancer Chair: Hiroaki Kawano	International Session 22 Bone and Soft Tissue Tumor Chair: Hiroaki Chuman	International Session 23 Leukemia Chair: Dong-Wook Kim	International Session 24 Leukemia Chair: Dong-Wook Kim	International Session 25 Leukemia Chair: Dong-Wook Kim
	第4会場 303 (3F)		International Session 20 Ethics for Clinical Research Chair: Kazuhiko Fujisawa	International Session 21 Esophageal Cancer Chair: Hiroaki Kawano	International Session 22 Bone and Soft Tissue Tumor Chair: Hiroaki Chuman	International Session 23 Leukemia Chair: Dong-Wook Kim	International Session 24 Leukemia Chair: Dong-Wook Kim	International Session 25 Leukemia Chair: Dong-Wook Kim	International Session 26 Leukemia Chair: Dong-Wook Kim	International Session 27 Leukemia Chair: Dong-Wook Kim	International Session 28 Leukemia Chair: Dong-Wook Kim
	第5会場 304 (3F)		International Session 20 Ethics for Clinical Research Chair: Kazuhiko Fujisawa	International Session 21 Esophageal Cancer Chair: Hiroaki Kawano	International Session 22 Bone and Soft Tissue Tumor Chair: Hiroaki Chuman	International Session 23 Leukemia Chair: Dong-Wook Kim	International Session 24 Leukemia Chair: Dong-Wook Kim	International Session 25 Leukemia Chair: Dong-Wook Kim	International Session 26 Leukemia Chair: Dong-Wook Kim	International Session 27 Leukemia Chair: Dong-Wook Kim	International Session 28 Leukemia Chair: Dong-Wook Kim

- 1) 正しい知識を身につけ、がん罹患しないための健康づくりに取り組む意識啓発ができるばかりではなく、保護者・地域の意識啓発も期待できる
- 2) がん罹患経験者のメッセージを聞き、「命を見つめ、命の大切さ」について気づかせることができ、人間・人権教育にも位置付けることができる
- 3) 視覚的に子供が学べる教材にし、指導者向けの「指導の手引き」で「スライドの趣旨」や「指導上の留意点」を明確にすることにより、教員誰もが指導できるようにしたことが有効であることが報告されました。

さらに、全国がん患者団体連合会の天野慎介様からは、教育の実施にあたり、医療従事者やがん経験者などの外部講師によるがん教育や教材、授業による児童生徒への心のケアなど、がん教育においてお

さえておくべき事項を共有しておく必要があるとのご発言をいただきました。

- これらのご発表を踏まえ、教材が、
- 1) 現代の小学生の興味を引く内容になっているか
 - 2) 指導目標に見合ったものとなっているか
 - 3) 現場の教員の負担軽減に役立つ内容か
 - 4) 子供たちの理解度を適応したものとなっているか
 - 5) 子供たちががんを知ることで受ける可能性のある精神的苦痛や心のケアにも配慮したものになっているか

などについて議論されました。固定討論者のみではなく会場からのご意見もいただきましたが、その多くは、現有の教材はまだまだ検討の余地を多く残しており、今後、すべての関係者が協力してより良い教材の作成を目指すべきといったものとなりました。

Part 2. 外部講師の確保と教員研修・育成システム

Part 2. では、医療従事者やがん経験者などの外部講師の活用と、教員の教育について、

- 1) 人材を確保する立場から群馬県教育委員会の生形 学先生、学会の立場から日本癌治療学会社会連携・PAL委員会委員長の相羽恵介先生
 - 3) 患者の立場からNPO法人がんサポートかごしま 三好 綾様
 - 4) 教員研修から教員養成という視点から日本女子体育大学の助友裕子先生
- にご発表いただきました。

教育と医療の現場との間には距離がある。学校教育の場にある者は医療関係者を知らず、医療関係者にあるものは教育の現場に疎い。互いにどのように接点を持ち、限りある条件の中でいかに効率的ながん教育を進めていくか、これを仲介する立場にある教育委員会も頭を痛めているとの生方先生のご指摘に始まり、相羽先生からは、学会としても可能な限りこれを支援したいが、具体的にどのようにアプローチが有効なのか模索しているとお話をいただきました。

こうしたなか、平成22年から「いのちの授業」を開始し、患者の立場で「語り手」を養成しつつ、約6,000名の児童・生徒に「がん教育」を実施してきた三好さんのご発表は、大きなインパクトを与えました。子供たちに寄り添い、直に目を合わせ、命の大切さを伝える試みのご発表は、教える側からの目線に終始しがちな本シンポジウムの議論に、子供たちを主語に討論すべきだとの新たな視点を与えました。

また、保健体育科教員養成に携わる助友先生からは、がん教育の実施により最も影響を受ける集団が教職員であり、健康教育のみならず学校教育において「がん」を教材とすることのメリットに気付いてもらうきっかけづくりを教員の研修に盛り込むとともに、保健の授業を楽しく指導できる教員の養成を進めたいという、意欲的なご発表がなされました。

討論では、主に教育と医療の現場を橋渡しするシステムの構築が主題となり、学会等がこれに参画することの必要性も示されました。

Part 3. がん教育の評価とフォローアップ

本partでは、授業評価と授業後の児童生徒等のフォローアップ、心のケアの在り方について発表と討論が行われました。

聖心女子大学の植田誠治先生は、授業評価はそれを行う授業科目の目標によって異なる。授業者が自身の学習過程について評価していくと良い。ただ、がん予防等の行動に結び付く自己効力感のような観点についての評価も求められ、これを学校においてフォローアップしていくことはかなり難しい。経年的変化を評価することも重要である。と述べられ、日本医師会の羽鳥裕先生は、これまでの日本医師会、同学校保健委員会の健康教育に関する取り組みを紹介され、学校と学校医の個人的つながりではなく、教育委員会、医師会、専門医会が連携して地域に根ざしたがん教育体制の構築が必要である。

がん教育の推進を機に「児童生徒等の健康支援の恒久的仕組み」の構築を望むと結ばれ、佐賀県医療センター好生館の中川原 章先生は、がん及び小児がん専門家としての立場から、小学校のがん教育は、「がんとはなにか、その子たちをどう支えるか、命というものがいかに大切か」を教えるものでなければならず、授業を受けた子供たちのみではなく、親や家族、地域社会がどのように変わったかのフォローが

必要である。子供のがん教育を通して、まず我々大人が変わること、そして地域社会の意識が変わることが最も重要であると述べられました。

また日本癌治療学会のがん診療連携・認定ネットワークナビゲーター委員会委員長の片渕秀隆先生は、学会も小学校でのがん教育の支援に参画すべきとの前提で、大学生が行う子宮頸がん啓発活動で中・高年の大人には発想できない様々な企画が実行されてきた例をお示しになり、児童生徒と近い年齢の人たちのがん教育への参画を提案されました。

討論では、がん教育は、「健康と命の大切さについて学び、自らの健康を適切に管理し、がんに対する正しい知識とがん患者に対する正しい認識を持つ」ためのもので、これが円滑かつ効果的に進められているかの評価は極めて重要な課題である。

同時に、学校でがん教育を受ける児童・生徒には、小児がんの当事者や小児がんの既往のある児童生徒、家族にがん患者がいる児童生徒、がんで家族を亡くした児童生徒も含まれることから、授業を行う際、事実を知った後の児童・生徒の精神的ケアや、がん差別を回避するために配慮が不可欠であることが再確認されました。

おわりに (がん教育支援横浜宣言2016)

本シンポジウムを通じて、小学校のがん教育はすでに実務の段階に入っているものの、これを実効性あるものとするには、いまだ多くの課題が山積していること、なかでも今回取り上げた、①教材、②外部講師・教員の確保、③授業評価と子供たちのケア、は大きな課題であり、今こそ関係者が協力して行動を起こすべき時であること、が示唆されました。

これをうけて、最後に北川知行先生(UICC日本委員会)、北川雄光先生(日本癌治療学会 理事長)、中野隆史先生(第54回日本癌治療学会学術集会会長)がご登壇され、下記にしました「がん教育支援横浜宣言2016」に調印され、シンポジウムが終了いたしました。

同宣言は、具体的な行動を示したものではありませんが、その第一歩として、UICC日本委員会と日本癌治療学会が“小学校でのがん教育の支援”に参画する意志を明確化したもので、今後の展開の礎になるものと思われま



“小学生からのがん教育”

佐賀県医療センター好生館・理事長

中川原 章

昭和41年（1966年）「世界がん会議」が東京で盛大に開催され、その際に「UICC日本委員会」が設立されました。爾来、わが国のがん研究は新しい段階に入り、飛躍的な発展を遂げて来ましたが、その50周年を記念して、昨年10月22日に、「小学生からのがん教育」をテーマとして、UICC日本委員会が日本癌治療学会との合同シンポジウムを横浜で開催しました。

シンポジウムは、望月友美子先生（UICC日本委員会/国立がん研究センター）と西山正彦先生（日本癌治療学会/群馬大学・病態腫瘍薬理学）の司会で進められ、

Part 1: 教材開発（教師用、子ども用）

Part 2: 外部講師の確保と教員研修・育成システム

Part 3: がん教育の評価とフォローアップ

の三部構成で行われました。

先ず冒頭で、北川知行先生（UICC日本委員会委員長/がん研究会がん研究所名誉所長）が「小学生のがん教育：現状と課題」と題して、三つの目的である、

- 1) がん予防の姿勢を植えつけること
- 2) 命の大切さを考えさせ生きる力を与えること
- 3) がんの仲間を暖かく支える心を育むこと

について解説され、力強くシンポジウムが始まりました。

最初の**Part 1**では、望月先生が、小学生を対象としたがん教育の既存の教材について紹介された後、中川恵一先生（東京大学附属病院・放射線科）が「よりよい教材作成を目指して：提供する立場から」と題して、次年度から文部科学省が全国で始めようとしているがん教育の目的は、

- 1) がんについて正しく理解することができるようにすること
- 2) 健康と命の大切さに在りて主体的に考えることができるようにすること

の二点であること、ただし、小学生では後者の方が主体となることを説明されました。

また、細山貴信先生（豊島区教育委員会・指導課）は、4年間にわたる豊島区のがんに関する教育の実践について話され、子どものがん教育は実践可能であり、素晴らしい成果を産むことを示されました。

また、天野慎介さん（全国がん患者団体連合会）は、がん教育において外部講師が生徒に話すことの重要性を強調され、小児がん患者が生徒の中にいる可



能性や、家族にがん患者がいる生徒、家族をがんで亡くした生徒への配慮が必要なことを話されました。

Part 2では、生形 学さん（群馬県教育委員会事務局・健康体育課）が「人材を確保する立場から」、相羽恵介先生（日本癌治療学会社会連携・PAL委員会委員長/東京慈恵会医科大学・腫瘍・血液内科）が「学会の立場から」、三好綾さん（がんサポートかごしま）が「患者の立場から」と題して、それぞれの立場が抱えている問題や課題について話され、小学生からのがん教育は不可能ではないが、まだ容易ではなく、様々な問題があることを提起されました。

最後に、助友裕子さん（日本女子体育大学・体育学部・スポーツ健康学科）が「教員研修から教員養成まで」と題して、がんという教材を活用した人材育成について締め括られました。

Part 3では、植田誠治先生（聖心女子大学・文学部・教育学科）が、「授業評価と児童生徒等のフォローアップの在り方」について、小学生からのがん教育の評価の在り方とその難しさ、さらには経年的評価を行うことの重要性について話されました。

また、羽鳥 裕先生（日本医師会常任理事）は、がん教育の推進とその評価には、

- 1) 学習内容とその効果
- 2) 外部講師の評価
- 3) 組織体制の整備

という3つの視点があることを示されました。さらに、

中川原 章（佐賀県医療センター好生館・理事長）は、小児がん専門家の立場から、小学生のがん教育には、仲間にいる小児がんの友だちのことをよく考える必要があり、そのことが命の授業に繋がること、そして、小学生のがん教育はすでに草の根で始まっており、実行可能であることを強調しました。

一方、片渕秀隆先生（日本癌治療学会がん診療連携・認定ネットワークナビゲーター委員会委員長/熊本大学・生命科学部・産科婦人科）は、子宮頸がんの市民への啓発活動の経験から、高校でがん教育を受けた大学生が「小学生のがん教育」に一翼を担うようになるのではないかと締められました。

最後に、学会の立場から井本滋先生（日本癌治療学会教育委員会委員長/杏林大学附属病院・外科（乳腺））、現場から大澤正則先生（埼玉県川口市立飯仲小学校）、文科省検討会座長の立場から衛藤

隆先生（東京大学名誉教授）が討論者として発言されました。そして、このシンポジウムの発表及び討論を集約され、小学生からのがん教育は実現可能であるが、しかし、まだまだ不安で解決しなければならない問題も山積している、と締めくくられました。

そして、北川知行先生、北川雄光先生（日本癌治療学会理事長/慶應義塾大学・外科）中野隆史先生（第54回日本癌治療学会学術集会会長/群馬大学・腫瘍放射線学/群馬大学・重粒子線医学研究センター）の連名で、「UICC日本委員会・日本癌治療学会 小学生からのがん教育支援宣言」が高らかに発表され、記念すべきシンポジウムの幕が降りました。

冒頭で話された北川知行先生の三つの目的へ向かって、日本のがん教育のリーダーの方々の気持ちがひとつになったような、まさに50周年記念に相応しい、爽やかなシンポジウムでした。

学校関係者の立場から見たこれからの「がん教育」

UICC日本委員会・日本癌治療学会合同シンポジウムに参加して

豊島区教育委員会 統括指導主事

細山 貴信

1 UICC日本委員会・日本癌治療学会 小学生からのがん教育支援宣言

平成28年10月22日（土）、UICC日本委員会・日本癌治療学会合同シンポジウムに参加させていただきました。その折、「UICC日本委員会・日本癌治療学会 小学生からのがん教育支援」を宣言されたことに、学校関係者として大変感銘を受けました。

がん治療に携わる専門医をはじめとした学会員の皆様、がん患者、り患経験された皆様、教員養成・研修に携われる皆様、学校医の皆様等、それぞれのお立場で、第一線でご活躍されている皆様が一同に介してのこの宣言は、非常に意義深く、「とうとうこまで小学生のがん教育は進んできたのだ!」と実感した記念すべき瞬間でありました。

この場に立ち会うことができたことを誇りに思うと同時に、皆様の「小学生からのがん教育を」という熱

い思いに対しまして、学校関係者の一員として、あらためて心から感謝を申し上げます。



2 今後の小学校教育の動向 (社会に開かれた教育課程の実現)

平成29年3月、文部科学省から新学習指導要領が公示され、10年先を見据えた小学校教育の道筋が示され、新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた目標・内容の見直しが行われました。今後、全国の小学校で平成32年度全面実施に向け、準備を進めることとなります。

今回の改訂では、「生きる力」を子供たちに育むために「何のために学ぶのか」という学ぶ意義を共有しながら、全ての教科の目標や内容を「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力」、「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱で整理されています。豊島区が実践している「がん教育」に置き換えますと、「知識及び技能」については、がんとはどんな病気なのかを学習すること。「思考力・判断力・表現力」については、がんを予防するために自分ができることは何だろう?と考えたり、子供同士や家族で話し合ったりすること。「学びに向かう力、人間性等」については、がんになり患された方のお話を聴いたり、命の大切さ、自分の健康について考えたりすることです。

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を子供たちに育むという、「社会に開かれた教育課程の実現」が今後、目指されることとなり、このことは、UICC日本委員会・日本癌治療学会 小学生からのがん教育支援宣言の趣旨とまさに一致するものであります。

3 がん教育について本当に バリアがはられているのか

小学校からの「がん教育」の必要性は誰もが認めているが、いろいろなバリアがあり、なかなか実現しない。「豊島区ではどうして実現できたのか?」という、お問い合わせをよくいただきます。現在、学校現場では、様々な教育課題について真摯に向き合い、教育活動を展開しております。

そんななか、〇〇教育と称して出前授業や教育実践のご提案を様々な分野の方からいただきます。各学校においては、子供たちや学校、地域の実態を適切に把握し、その教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てて



いるため、取捨選択をせざるを得ない状況にあることは事実であり、それがバリアとお感じになられることもあるかと思います。

しかしながら、「何のために学ぶのか」という学ぶ意義を子供に共有させ、「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力」、「学びに向かう力、人間性等」を育む責任を学校は負っています。したがって、各学校は、教育内容や時間配分、必要な人的・物的体制の確保はもちろんのこと、学習の効果を最大にできるようにカリキュラム・マネジメントをしていることも、社会全体の皆様にご理解いただく必要があると考えます。

日本人の2人に1人が、がんに罹患するというデータは、未来のある子供たちの健康や命にかかわる重要な事実であり、がんという病気についての正しい知識の理解、予防方法や検診、治療法、緩和ケア等、最新のがん対策等を子供たちに正確に伝えなければならないことは、誰もが認めるところです。それを「どのように学ばせるのか?」これは、子供や地域の実態をよく知っている学校、教職員とよく協議をしていただくことが肝要となります。

学校は、保護者や地域の人々、専門家をはじめとした外部の人々等との連携・協力が欠かせないことを知っております。子供たちに必要となる資質・能力を育むという目標のもと、一方通行ではなく、学校と相互に理解・連携を図りながら進めていただけることを切に願うところであります。

UICC世界がん会議(1966年-東京)

50周年記念祝賀会



日 時:平成28年10月22日(土)
午後4時~6時(3:30開場)
会 場:横浜みなとみらい
インターコンチネンタルホテル
ボールルーム



タバコフリーサミット2017を開催して

日本対がん協会 参事

望月 友美子

2020年のオリンピック・パラリンピックに向け、開催都市・東京の禁煙化が話題になっている。1964年の東京大会ではオリンピック記念ピースやオリンピアというたばこが発売されたことを思い起こせば、隔世の感があるが、1988年のカルガリー大会からたばこ産業のスポンサーシップが禁止されている。さらに、世界保健機関（WHO）と国際オリンピック委員会（IOC）との協定でオリンピック開催地の禁煙環境が求められ、近年の開催地はいずれも法律や条例で禁煙環境を実現してきた。塩崎恭久厚労大臣は着任後にいち早く「保健医療2035」ビジョンを打ち出し、国際水準の健康政策の実現とローカルイニシアチブの重要性を指摘していた。塩崎大臣のリーダーシップで健康増進法改正により現行水準をはるかに上回る受動喫煙防止の法制化が提案されたが、自民党たばこ議連等からの猛攻により、今期国会提出が見送られてしまった。

5月27日（土）に開催したタバコフリーサミット2017は、そのような政治的駆け引きの真只中にネクストステップを討議するために、厚生労働省、東京都医師会、日本対がん協会などの共催で東京都医師会館において開催されたものである。大会長は東京都医師

会・尾崎治夫会長、副大会長は同・蓮沼剛理事、実行委員長は日本対がん協会・望月友美子参事の体制であった。

第1部はナショナルイニシアチブをテーマに、厚生労働省による受動喫煙防止法制（健康増進法改正）をめぐる最新の状況と実現のために何が必要かを、日本医師会・今村聡副医師会長の司会により様々なステークホルダーとともに討議した。

登壇者は、東京都医師会・尾崎治夫医師会長、がん研究会常務理事/UICC日本委員会・野田哲生委員長、宋美玄医師（産婦人科医）、長谷川一男・全国肺がん患者連絡会代表、NPO法人フローレンス・駒崎弘樹理事長（ビデオ出演）。特に次世代の子供たちの当事者である産婦人科医や保育園事業者、そして受動喫煙被害者としての肺がんサバイバーからの強いメッセージはこれまでの禁煙関連行事では得られなかった内容であった。さらに、ゲノムレベルで喫煙や受動喫煙による傷がわかることが報告され、た



ばこの害は決定的にわかっていることが指摘され、また医師会等の医療関係団体が幅広い連携により署名活動などを通して政策を動かそうという機運についても述べられた(すでに300万通を超える署名が集まり、たばこ政策史上最大規模である)。

第1部では、世界で初めて「受動喫煙と肺がん」の疫学研究を著した平山雄・元国立がんセンター疫学部長の功績を記念した「タバコフリー日本賞」を創設し、片野田耕太・国立がん研究センター部長に授与した。片野田氏は平山博士の後継者と自認し、がんの統計、喫煙や受動喫煙による超過死亡の試算、たばこ白書第4版の編纂など、21世紀の我が国のたばこ政策の推進の礎となるような多大な業績を挙げた。

第2部では、ローカルイニシアチブをテーマに、来賓として迎えた小池百合子東京都知事により、公約としての受動喫煙防止にかかるリーダーシップが強く示された。飲食店の禁煙化のみならず、子供の家庭内での受動喫煙曝露を守るための条例も検討しているとのことである。また自民党、公明党、都民ファーストそれぞれの幹部も出席し、いずれも受動喫煙防止対策には賛成であることが述べられたことは、程度の差こそあれ、小池知事により今までにない状況が生み出されていることがわかる。

引き続き、3つのセッションを設け、多様な課題に対する多様な解法として、「たばこ問題のデバイスチェンジ(新型たばこの諸問題)」、「禁煙支援の未来型アプローチ(遠隔診療やアプリの活動)」、「地



域のつながりによる解決（調布、函館、日本橋）」について、それぞれ3人ずつの演者がプレゼンテーションを行った。

第2部では、グラスルーツによる禁煙活動の重要性を提唱してきた京都のNPOに所属していた医師、繁田正子氏の理念を記念した「タバコフリー社会デザイン賞」を創設し、北海道美唄市医師会・井門明医師会長に授与した。美唄市は市町村として初めて受動喫煙防止条例を制定したが、その立役者の一人である。受賞講演では条例制定過程に関わった市役所、医師会、市議会、商工会議所、外部の応援団などとの粘り強い交渉と協働が生き生きと語られ、政策は人のつながりで実現することが示された。

最後に、禁煙推進や患者活動に関わる個人や団体、10名が将来に向けた各々のコミットメントを表明し、たばこ問題における多角的な視点と多様な担い手による広がりが実感された。

今回の企画で特に念頭においたのは、ほぼ半世紀

にわたる禁煙推進活動（研究から市民運動に至るまで）を「クロニクル」の形で俯瞰し、それぞれのステークホルダーの立ち位置と方向性、発展の歴史をたどりつつ、これからの未来をどう築いていくか関係者がビジョンを共有するためのプラットフォームを形成したことである。

たばこ問題は生命の問題であると同時に政治や経済の問題であり、禁煙補助剤の登場により「医療化」が進んだが、それだけでは解決のためには限界があり、さらに「社会化」が必要であることを参加した当事者や聴衆の皆様を感じていただけたらだろうか。500名の聴衆から200通のアンケートが還ってきたことから、その手応えは十分感じるが、たばこ産業が21世紀を生き延びるために万を持して投入した「新型たばこ製品」により、新たなたばこ流行・たばこ戦争が始まっていることを考えると、躊躇も猶予もなく、さらに幅広い強力な連携により次世代にタバコフリー社会を残すことが次の目標である。





World Cancer Summit & World Cancer Congress 2016

UICC-ARO Director

東京大学大学院情報学環・学際情報学府 特任教授

赤座 英之

Mobilizing Action Inspiring Change をテーマとしたWorld Cancer Congress (以下WCC) がフランスのパリで2016年10月31日から11月3日の日程で開催された。

UICC-AROはWCCの3日目である11月2日におこなわれたUICC-AROのセッションにて、How can we mobilize action to realize UHC in Asia? と題して、アジアにおける癌医療のUHC実現にむけた討議を行った。WCCは、近年、公募枠は欧米中心のセッションの組み方が続いた中、今回ようやく公募枠でのセッション開催がなかった。UICCにもようやくアジアの癌への関心が高まってきた機運を感じる。アジアの癌医療においては、UHCの実現は喫緊の課題である。

今回、WHO神戸センターの野崎慎仁郎先生とともに座長をつとめ、順天堂大学堀江重郎先生、国立保健医療科学院福田敬先生、インドネシア大学Hasbullah Thabrany先生とともに討議を行った。特別発言としてアステラス製薬安川健司氏(現・副

社長)にも加わってもらい、アジアの癌医療におけるUHCの現状の課題と今後の展望をUICC-AROとしてまとめてみた。

詳しい内容については、ミーティングレポートとして、APJCPに投稿しており、HP上にて公開予定であるので、それをご覧いただけたらと考える。UICC-AROはアジア地域におけるUHC実現のための議論のプラットフォームをつくる役割を早くから行っている。このテーマは、ソウルでのAPCC2017そして第76回日本癌学会UICC国際セッションと、継続性をもって議論を続けていく予定である。

今回、WCCでは、World Cancer Leaders' Summit (以下WCLS) にUICC-ARO Directorとして招待をうけ、参加したのだが、今後のUICCの方向性においても重要な意味を持つ会であったと考え、報告させていただく。

今回は60か国約300人の招待者からなる大規模な会であった。WCLSは毎回必ず、World



Health Organization (WHO), the International Agency for Research on Cancer (IARC) and the International Atomic Energy Agency (IAEA), とホスト国のUICCメンバーによってサポートされている会であり、文字通り、世界のがんのリーダーを結集させて、今後の世界の癌政策を展望するものである。

サミットの冒頭、Dr. Tezer Kutluk, からWorld Cancer Declaration Progress Report2016の完成をうけて今後のUICCとしての取り組みにむけた話があった。このWorld Cancer Declaration Progress Report2016は、我が国が加わっていなかったことは残念なことではあるが、世界の癌医療の実情把握をUICCとしてまとめ上げた画期的な成果である。こうしたUICCの活動は、癌への国際社会からの確実な支援を獲得するための根拠として大きな政策オプションに繋がるものである。

続いて行われたKEYNOTEでは、IARCのDr Christopher Wildから癌登録の重要性、UNからはDr Philippe Douste-Blazy, が、アルマ・アタ宣言をひき、プライマリケアの重要性などについてのべられた。彼らの力強い口調には、癌をヘルスアジェンダとして位置付けていかねば、今後の癌の急増に立ち向かえないという国際社会のリーダーたちの緊迫感が伝わってきた。

特にそういった意味で、今回のWCLSの目玉ともいえるべきは、Health Ministers' discussion panelsであった。全体は2部に分かれて構成されており、1部は、オランダドイツなど欧州のHealth Ministerたちが壇上で討論をした。Financial Times のMr. Andrew Jackが巧みな話術で司会進行をして、欧州の癌医療の実情とその課題についての討論がなされた。癌医療の発展の恩恵を受ける先進国において、負担可能なコストはどこまでなのかという非常に悩ましい話に議論が及んだ。

2部は、次期会長のProfessor Sanchia Arandaが司会進行をつとめ、ナイジェリア、セネガルなどの開発課題を抱えた地域の癌医療の課題についての討論が熱くかわされた。

癌医療は非感染症の中でもとりわけ対応が難しく、経済的負担が大きいゆえに、先進国も途上国も医療制度の中で、複雑な課題に直面している。今回は、1部と2部に分かれて先進国と途上国の課題につ



いてそれぞれ討議されたが、持続可能な社会の実現という共通のテーマを今後はどのようにして、経済発展の異なる地域で共有していくか、ハブとなるUICC活動の意義は大きく、UICCの組織の力量が試される局面になるだろう。

今回は、300人の参加者が一同に会しながらも、それぞれが8人ほどの丸テーブルごとに席が用意されており、長時間にわたるセッションを聞きながらも、そのテーブルごとにそれぞれが抱える課題について討論する時間も設けられていた。私は、垣添先生、田島先生とともに、UICC PresidentだったDr. Franco Cavalli, やDr. Mary Gospodarowiczと同じテーブルだった。私としてはUHCを念頭に、より現実の臨床に即した実現性の高いUHCの在り方などについての議論の必要性を感じた。

WCLSはその目的のひとつに「Creating a force which galvanises politicians and policy makers and increases cancer's visibility on the international public health agenda.」としているだけあって、特に今回は、2017年のWHO総会を見据えて、UICCがグローバルな力の結集を組織として国際社会に向けて可視化しようという意図が十分感じられた会であった。この会で頭出しをされた、次世代の癌医療に向けた官民パートナーシップ構想などは、今後にむけて動きだしており、UICCが国際社会の中で組織として新たな展開をスタートさせようとしている。UICC-AROとしても、こうしたグローバルな動きを見据えてテーマとしてきたUHCの実現を基軸に、アジアの癌医療の発展に貢献したいと考える。

Astellas Advocacy Breakfast

Changing Tomorrow: Collaborating to Enhance Clinical Trials

順天堂大学大学院医学研究科泌尿器外科

堀江 重郎

UICCには医療政策の関係者や医療者に加えて多くの患者団体が参加している。日本製薬工業協会のホームページには「研究開発型製薬企業は、新薬の継続的な創出と安定的な供給を通じて、世界の医療と人々の健康に貢献し「患者参加型医療」の実現に寄与する」ことがうたわれており、さらに「新薬の創薬段階から市販後における医薬品の適正使用推進や安全対策に至るまで、医薬品と患者さんが関わるあらゆる場面において、患者さんやそのご家族のニーズや悩みを理解して対応していく」ことが述べられている。

11月2日朝に開催されたAstellas Advocacy Breakfast “Changing Tomorrow: Collaborating to Enhance Clinical Trials”には製薬企業（アステラス）からオンコロジーのマーケティング担当者のPeter Sandor氏と、戦略担当役員の安川健司氏が参加し、患者団体からは、Ian Olver (The Sansom Institute for Health Research, Australia), Sabe Sabesan (Townsville Cancer Center, Australia), Linda House (Cancer Support Community, US)の3氏が参加して患者が臨床試験に参画することの現在の問題点と展望が話し合われた。

まず患者の参加については、臨床試験に参加できる「特権」「利益」「恩恵」を持つ、「社会から隔離された」「患者」という立場でなく、むしろ臨床試験に主体的に参加する「生活者」としての「消費者」という立場が強調されていた。臨床試験に関しては、20%を超える試験適格者が実際には参加をためらう理由として、プラセボ群の存在が、参加者を対象とした実験という感じを与えていることが指摘され、臨床試験の意義や構成について「消費者教育」も必要であると同時に、臨床試験の立案には「消費者」の参加が望ましいことが指摘された。

さらに臨床試験のアウトカムとして、規制当局はOSを強調するものの、社会生活を営む消費者には、日々の生活をどう過ごせるか、社会活動における副作用の影響により大きなインパクトがあるという



指摘があった。FDAでは“Patient-focused drug development (PFDD)”により、医薬品の承認プロセスに患者、家族、ケア提供者の評価が組み込まれているが、臨床試験の参加者に、臨床試験の結果が分かりやすい形で示され、適切なフィードバックを得る必要性も議論された。

さらに臨床試験の立案には「消費者」の参加が望ましいことも議論された。また臨床試験に参加するため仕事を休むことや、通院の交通費が経済的障壁となることも指摘された。臨床試験の多くは都会の大病院で登録されるが、オーストラリアではITを活用し、遠隔地の小さな医療機関でも質の高い臨床試験を行っている試みが紹介された。

企業からは長期にわたる薬剤開発が薬価を押し上げることから、現状の臨床試験のあり方が今後IT、AIの活用などで薬剤の効果や有害事象の評価が大きく変化する可能性も指摘された。

筆者としては臨床試験は製薬メーカーが実施するものの、薬剤は公共財でもあり、臨床試験は公共事業に匹敵する事業ではないかという印象を持った。適切な費用対効果の評価に、「消費者」の評価も必須であると思われた。

APCC2017に参加して

東京大学大学院情報学環・学際情報学府特任講師
一般社団法人アジアがんフォーラム代表

河原 ノリエ

6月21日から6月24日までソウルにて開催されたアジア太平洋癌学会APCC2017に参加したので報告をする。UICC-AROはアジア地域の癌医療におけるUHCの実現について継続的に重ねてきた議論を踏まえ、UICC-AROセッション「What is the Role of the Cancer Research Community in Realizing UHC for Cancer in Asia?」を開催した。(写真1)

今回、Sanchia Aranda UICC会長も迎え、2017年5月のWHO総会において決議された2019年に向けての癌医療への数値目標の設定などにもふれながら、各国の癌医療のUHC実現の可能性について検討を重ねた。

日本からは堀江重郎教授(順天堂大学)、韓国からはDr. Yeul Hong Kim, (Chairman, Korean Cancer Association,) マレーシアからはDr. Saunthari Somasudaram, (National Cancer Society Malaysia, 次期WCC2018会長)の発表が続き、全体討論においては、Cary Adams CEOやUICC理事Dr. Jeff Dunnも加わってかなり掘り下げ

た議論が行われたので、詳細は取りまとめたので、近日中に投稿作業をおえてHP上で共有を図る予定である。

またSanchia Aranda会長がセッションの中で言及された、(写真2) C/Can 2025: City Cancer Challenge (<http://www.uicc.org/convening/c-can2025-city-cancer-challenge>) (C/Can2025)」のような企業コミットメントの強化と官民パートナーシップの形成は、今後限られた医療資源の中で急増する癌と向き合うことになるアジア地域にとっても大きな学びの機会となるという印象を受けた。

癌医療は国家という枠組みを中心に構築されてきており、感染症と異なり、国を越えて社会がどうがんという病と向き合うのかを提言する枠組みがなかったため、各国ごとに医療、社会保障コストなどが閉じられた枠組みで論じられてきた。しかしUHCという共通の政策概念を軸にすることで各国が学び合う場ができる可能性が芽生えては始めている。癌研究者



写真1

コミュニティの中でこうした政策概念の認識共有をしていくことは重要であり、日本癌学会でも、この議論をベースにさらに発展させて次のWCC2018に繋げていけたらと考える。

APCCは、もともと日本の癌研究者を中心にしてアジア版UICCという形でできたこともあり、UICC日本委員会も継続的に深くかかわってきた学会であった。特に今回、UICC本部のはじめての試みで、CEOプログラムの一環としてWCC開催年でない年に行う‘Leadership in Action’ meetingが開催され、(写真3) 15か国のアジア地域のUICCメンバーが集まり、様々な地域課題を共有した。

また日本からも、北川雄光先生、吉田和弘先生をはじめとするUICC日本委員会関連の多くの癌研究者が集った盛大な会であった。しかしながら、残念なことに、昨今の中韓の外交上の問題もあり、中国からの参加の多くが取りやめとなっていた。中国は、一帯一路構想を掲げて癌国際連携を標榜しており、今年4月にUICC次期会長やUICC理事、WHO関係者なども招聘してThe First Meeting on the school of Oncology for Belt and Road Countries And

Leader summit on cancer Countrolを開催しており、私も招待を受け、UICC-ARO活動やJICAを通じた中国農村部での癌教育活動についての発表を行った。(写真4)

アジアの癌医療の国際連携は、今後も複雑な国際情勢の影響や、ESMOやASCOなど欧米の学会がアジアに積極的に進出していることもあり、アジアの癌研究コミュニティの在り方そのものも大きな変革の時期であると思う。そして、2015年以降、国際社会全体が、SDGsを目標として限られた資源のなかで持続可能な社会構造を目指している。そんな中世界銀行など大きな国際調整機関が癌医療にも深く関与し始める兆しが生まれている。UICCはWHOとの連携をさらに強め、癌医療の大きな国際社会の動きを作り出そうとして機能しはじめている。今回UICC-AROセッションの中では、これまでUHCというアジア地域の喫緊の課題にフォーカスした取り組みを行ってきたUICC-AROの果たす役割への期待について Dr. Jeff Dunn理事などからも述べられており、今後の目指すべき方向性について、みんなで共有できた良い機会であったと考える。



写真2



写真3



写真4

UICCセッション開催のお知らせ

第76回日本癌学会にてInternational Session 9として UICCセッションが下記の日時で開催されます

Session : Sept.30th (Sat) 9:00~11:30

場 所 : パシフィコ横浜

**What is the role of the cancer research community in realizing UHC for cancer in Asia ?
—Looking beyond the World Health Assembly cancer resolution in 2017**

Although tremendous advances have been achieved in cancer treatment, equity of care remains a challenging issue, with limited medical resources leaving many people still unable to access potentially life-saving care. This is an issue that is common to all countries and an urgent challenge is to ensure that the concept of Universal Health Coverage (UHC) is fully implemented in healthcare policies and practices in the Asian region. UICC Asian Regional Office (UICC-ARO) has been engaged in initiatives for UHC in cancer care from an early stage and following the historic adoption of the cancer resolution at the World Health Assembly (WHA) in 2017 it is now essential to engage in multi-sectoral discussions on how the Asian cancer community should provide further impetus to creating policy recommendations on UHC. In this session, researchers, politicians and policy makers will present on wide-ranging issues, seeking to discuss and catalyze actions across all areas of society and beyond national borders with a view to elucidating ways to achieve UHC across the Asian region in a manner that harmonizes with national healthcare and social security systems.

Chairperson : Hideyuki Akaza (The Univ. of Tokyo)

Chairperson : Jae Kyung Roh (Division of Hemato-Oncology, Konyang University Hospital)

.....
Opening Remarks : Hideyuki Akaza (The Univ. of Tokyo)

1. Perspectives of Cancer Control in the Emerging Context of Global Health
Hiroki Nakatani (KGRI, Keio University Global Research Institute)
2. The Role of the Cancer Research Community in Realizing UHC for Cancer in Asia
Jae Kyung Roh (Division of Hemato-Oncology, Konyang University Hospital)
3. Evidences of Access for Cancer Patients under UHC of Indonesia
Hasbullah Thabrany (The National Social Security Council and Universitas Indonesia)
4. Cancer care in Southeast Asian region: can we afford it?
Jasmine Lim (Department of Surgery, Faculty of Medicine, University Malaya)
5. What Japan can do to achieving desired goals of cancer treatments in Asia?
Shigeo Horie (Department of Urology, Juntendo University Graduate School of Medicine)
6. T-shaped approach to health system strengthening
Keizo Takemi (A member of the House of Councillors)

Discussion

Closing Remarks

World Cancer Day We can. I can.

ワールドキャンサーデーは、毎年2月4日に世界が一体となって、
がんについての意識と教育を高め、がんに向けてみんなの力で立ち向かおうという取り組みです。
UICC日本委員会はこれまでも、ワールドキャンサーデーに多くの活動をおこなってきました。

http://www.jfcr.or.jp/UICC/uicc_japan/symposium/index.html

がんの負担を軽減するために、
私たちは組織として個人として
どんなことができるのか？
ひとりひとりの力で世界はきっと変わる。
ワールドキャンサーデーは、
世界中で人々ががんのために
一緒にできることを考え、
約束を取り交わし、
行動を起こす機会です。

キーメッセージの日本語訳

UICCはみんなで気持ちをひとつにして取り組みを行うために、世界中で共通のツールを使ってこのキャンペーンを行っています。

テーマは「**We can. I can.**」

19のキーとなるメッセージが用意されています。

2018年2月4日に向けて2017年9月4日からキャンペーンがスタートします。

ポスターの日本語訳をUICC日本委員会のご協力で作成したいとおもいます。

日本語訳のアイデアをお待ちしています。



World Cancer Day Key messages

Please refer to the World Cancer Day factsheets for more information on each key message :

http://www.worldcancerday.org/sites/wcd/files/atoms/files/2017WCD_AllFactsheets_English.pdf

Key message	Translation
We can inspire action, take action.	
We can prevent cancer.	
We can join forces to make a difference.	
We can build a quality cancer workforce.	
We can challenge perceptions.	
We can improve access to cancer care.	
We can create healthy cities.	
We can create healthy workplaces.	
We can create healthy schools.	
We can make the case for investing in cancer control.	
We can shape policy change.	
We can support others to return to work.	
I can understand that early detection saves lives.	
I can love, and be loved.	
I can make my voice heard.	
I can return to work.	
I can make healthy lifestyle choices.	
I can take control of my cancer journey	
I can ask for support.	

2017年8月30日 締め切り
UICC日本委員会 広報委員会
FAX : 03-3570-0546
uiccjapan@jfcf.or.jp



2017年度 World Cancer Day ポスター

UICC 日本委員会加盟組織

愛知県がんセンター	(一社) アジアがんフォーラム	大阪国際がんセンター
神奈川県立がんセンター	(公財) がん研究会	(公財) がん研究振興財団
(公財) がん集学的治療研究財団	静岡県立静岡がんセンター	国立がん研究センター
埼玉県立がんセンター	佐賀県医療センター好生館	(公財) 佐々木研究所
(公財) 札幌がんセミナー	(公財) 高松宮妃癌研究基金	千葉県がんセンター
東京慈恵会医科大学	がん・感染症センター都立駒込病院	栃木県立がんセンター
新潟県立がんセンター	日本癌学会	(一社) 日本癌治療学会
(公財) 日本対がん協会	(一社) 日本乳癌学会	(特非) 日本肺癌学会
(公社) 日本婦人科腫瘍学会	東札幌病院	(公財) 北海道対がん協会
三重大学医学部附属病院	宮城県がんセンター	

賛助会員 協和発酵キリン株式会社 (山極-吉田国際奨学金)
(公社) 日本放射線腫瘍学会

UICC日本委員会 2017年度役員

委員長	野田 哲生 (がん研究会)	UICC 本部	
幹事		Fellowship 委員	中釜 齊 (国立がん研究センター)
総務	中釜 齊 (国立がん研究センター)	TNM 委員	浅村 尚生 (慶応大学医学部)
学術	垣添 忠生 (日本対がん協会)	アジア・太平洋癌学会 (APFOCC)	
財務	吉田 和弘 (岐阜大学大学院医学系研究科)		赤座 英之
ARO 担当	赤座 英之 (東京大学大学院情報学環)	アジア・太平洋がん予防機構 (APOCP)	
予防・疫学領域担当	浜島 信之 (名古屋大学大学院医学系研究科)		Malcolm A. Moore
事務局担当	大野 真司 (がん研究会有明病院)	名誉会員	
監事	高木 敬三 (東京慈恵会医科大学)	杉村 隆 (元国立がん研究センター、日本学士院)	
	池田 徳彦 (東京医科大学)	井口 潔 (元がん集学的治療研究財団)	
専門委員会委員長		青木 國男 (元愛知県がんセンター)	
疫学予防委員会	浜島 信之 (名古屋大学大学院医学系研究科)	富永 祐民 (元愛知県がんセンター)	
喫煙対策委員会	望月友美子 (日本対がん協会)	大島 明 (元大阪府立成人病センター)	
患者支援委員会	北川 雄光 (慶応大学医学部)	武藤徹一郎 (がん研究会)	
TNM 委員会	佐野 武 (がん研究会有明病院)	北川 知行 (がん研究会)	
広報委員会	河原 ノリエ (東京大学大学院情報学環)	田島 和雄 (元愛知県がんセンター、三重大学)	
小児がん委員会	中川原 章 (佐賀県医療センター好生館)	日本委員会事務局 (がん研究会内)	
対がん協会	坂野 康郎 (日本対がん協会)	神田 浩明 (研究: 幹事会担当)	
UICC-AsiaRegionalOffice (ARO)		関本 敏之 (事務: 委員長業務補佐)	
	赤座 英之		

2018 年度の UICC 日本委員会総会は
7月28日(土) 12:00 - 14:30 に
経団連会館で行われます。

UICC ホームページ : www.uicc.org
UICC 日本委員会ホームページ : www.jfcr.or.jp/UICC
UICC-ARO ホームページ : <http://uicc-aro.org/>